

48. わら・割木・コクモカキ

山を持ってない平地の農村では、燃料の確保は大きな課題だった。わらや堤防のヨシ、落ち葉を集める。薪は山の村から売りにきた。

キヅミ・フナヅミ

A はキヅミ、B はフナヅミで、田の端で藁の保管するための藁塚の様式。秋～3月頃までキヅミに積んでいた（鳥飼八町）。ここらはフナヅミ（鳥飼上）。

わらをツシに上げる

わらはは持って帰ってクルマギ（滑車）でツシ（天井裏）に上げた（鳥飼八町）。

わらははツシに上げた。わらには米粒が残っているのでネズミの巣となる。夜になるとネズミの運動会だ。ネズミを狙ってヘビが住んでいた。ヘビは卵を飲み込むと高いところからわざと落ちて卵を割る。夜中にドサッという音で目を覚ますこともしばしば（三島）。

滑車

滑車は3種類が寄贈されているが、藁をツシに上げるのに使ったのはどの形か未確認。C は本体 18cm、全長 32cm。D は本体 22cm、全長 31cm で鉄製。E は幅 9cm。

堤防のヨシを刈る

冬に堤防でヨシ（葭＝葦）や木の枝を刈るのは父の仕事。刈ったら堤防に並べておいで牛連れて車（荷車）で運ぶ。ヨシは押し切りで切って焚く（三島）。

コクモカキ

高槻の山へコクモカキに行った。松葉を集めて柴でくるんで担いで帰ってヘツツイで焚いた（鳥飼八町）。「シバシに行く」といって千里丘の山手の個人の持ち山へコクモカキに行った。松葉のまじった落ち葉を掻く（千里丘東）。

F は『絵本通宝志』の江戸時代の浜辺。里山のコクモカキもこんな光景であろうか。

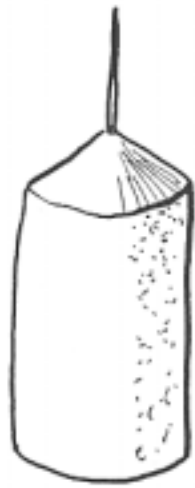
薪を売りにくる

3月頃、茨木・高槻の奥からコッテ牛にバリキ（馬力＝荷車）で売りにきた。コズエ（梢）とは雑木の枝で 1.3m ぐらいのもの。ワリキ（割木）は幹を割ったもの（三島）。茨木のイズハラからくる人に割木や火鉢の炭を買った。1台たのむと 10貫（三島）。薪は廃材を使って割木は買わなかった（千里丘東）。

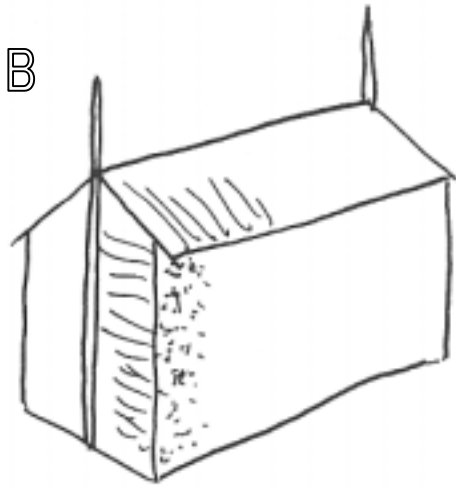
灰は肥料に

ヘツツイの灰は、灰小屋におく、ダンゴに3杯も4杯も田に持って行く。ナタネやムギの中にやる。火鉢の灰もわらばいを使った。固くなってくると入れ換えた（三島）。

A



B



C



D



E



F

